

おひさま はらっぱ

中川李枝子 さく 山脇百合子 え





おひさまはらっぱ

©一九七七年五月二五日 初版発行

一九七七年八月一〇日 第二刷

著者 中川李枝子

発行 福音館書店

郵便番号一〇一

東京都千代田区三崎町一丁目一番九号

電話(〇三)二九二一三四〇一

振替東京五一七六四五

印刷 精興社

製本 小林製本

●無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内にこわれたような本
がございましたら、お買い上げ月日、書店名をご明記のうえ、おそれい
りますが、本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

●NDC九一三／一九二ページ／二一センチ

おひさまはらっぱ

中川李枝子 さく

山脇百合子 え



福音館書店

もくじ

さちこちゃん 5

月^{げつ}ようびの ひみつ 27

おひさまこうえん 43

とってもいいなわ 71



ゆきだるま 85

ぐりとぐらの おお大そうじ 107

もんたの なつやすみ 121

くまの たんじょうび 141

三つ子^{みご}の こぶた 163



さ
ち
こ
ち
ゃ
ん





どんぐり町^{まち}で いちばん大^{おお}きい
どんぐりの木^きのすぐとなり、チ
ューリップほいくえん ばらぐみ
の さちこのいえがありました。
そして そのとなりは、ながい
あいだ くさぼうぼうの あきち
でした。

ところが、なつのはじめ、そこ
に たまごいろの 小^{ちい}さい きれ
いないえが 一^{いっ}けんたちました。
小^{ちい}さい きれいなえには、ふ
とつた大^{おお}きなおじさんと、ほっそ

りした　きれいなおばさんが　ひっこしてきました。

おじさんとおばさんは、カーテンをつけたり　しきものをしいたり、
かたづけたり、そうじをしたり、一日じゅう　あたらしい　いえの中なかで
うごきまわっていました。ですから、となりのいえのまどから　いっし
ようけんめい　おばさんたちのほうをみている　さちこのことには、き
がつきませんでした。

ゆうがた、おじさんとおばさんは、さちこのいえへ　ひっこしのあい
さつにきました。

さちこは、おじさんが　とてもふといこえで、そして　おばさんが
ほそい　きれいなこえで、おとうさんとおかあさんと　はなしをしている
あいだ、ずっと　げんかんのおくの　かいだんのかげに　かくれていま
した。

つぎの日。

小さい きれいないえの、小さい きれいなげんかんがあいて、かいものかごをさげた おばさんができました。

おばさんは、さちこのいえの まえをとおって、大きいどんぐりの木の下をとおり、ポストのある四つかどへきました。

おばさんは、ポストのまえをまがると、まっすぐ行って チューリツプほいくえんのまえをとおり、プラタナスどおりのマーケットへいきました。

おばさんは、マーケットで トマトときゅうりとたまごをかうと、プラタナスどおりを もどってきました。

そのときは ちょうど、ほいくえんのこどもが いえにかえるじかんだったので、おかあさんといっしょのこどもや、ともだちどうし かた

まった　こどもたちが、たのしそうに　おしゃべりをしながら、とおりをとびはねていました。



ほいくえんの門もんから、女おんなの子こがふたり、手をつないで　でてきました。

ほしぐみのみつこと、ばらぐみのさちこです。

「さちこちゃん、もつとはやく　あるいて　ちようだいよ。」

と、ほしぐみの　みつこがいました。ほしぐみは、らいねんいちねんせい一年生です。

「わたし、そんなにはやく　あるけない。」
と、ばらぐみの　さちこがいました。ば

らぐみは らいねんになっても、一年生^{いちねんせい}にはなれません。

「あるけるわよ。さちこちゃんも、らいねんは ほしぐみでしょ。こうやって、どんどんあるくのよ。」

みつこは さちこの手^てをふりほどくと、手^てを大きくふって、とてもはやく あるいてみせました。

「さちこちゃんて、わざと のろのろあるくんですもの。いやになってしまふ。」

みつこは そのまま わき目^めも

ふらずに さっさとあるいて、

ポストのある四^よつかどへいくと、

どんぐりの木^きのほうへ

まがりました。



「みつこちゃんの おこりんぼう。」

わたし、みつこちゃんなんか だいきらい。」

口^{くち}をへのじにむすんで、

なみだをふきながら ひとりであるいている

さちこに、おばさんは、ほそい きれいな

こえで、

「あなたのうちは どこなの。」

と、ききました。

「わたしが いっしょにいつてあげましょう。」

「いいの。わたし ひとりでかえられる。」

と、さちこはいいました。

「じゃ、そこまで おくってあげましょう。」



おばさんは、ほっそりした きれいな手^てで、さちこの手^てをとりました。
おばさんとさちこは、手^てをつないで ポストのある四^よつかどにきま
した。

「あなたのうちは どっちへいくの。まがるの、それとも まっすぐ？」
と、おばさんは さちこにききました。

「わたしのうちは、まがらないで まっすぐいくのよ、おばさん。」

さちこは、もう ないてはいません。なくどころか、おばさんの手^てに
つかまって、げんきに とびはねていました。

ふたりが 手^てをつないで まっすぐいくと、はたけがありました。

「あなたのうちは、おひやくしようにさんでしよう。」

と、おばさんがききました。

「わたしのうちは、おひやくしようにさんじゃないわ、おばさん。もっと

むこうよ。」

さちこは スキップをしながら、おばさんの手^てをひっぱりました。

はたけをとおりこすと 川^{かわ}があつて、お

ばさんとさちこは、はしをわたりました。

はしをわたると、森^{もり}がありました。

「あなたのうちは、きこりさんでしょ

う。」

と、おばさんがききました。

「わたしのうちは、きこりさんじゃないわ、おばさん。もっと むこうよ。」

おばさんとさちこは、手^てをつないで

森^{もり}へは行っていきました。



どっちをむいても 大きな木ばかり。

えだが かぜにゆれて、みどりののはがざわめき、たかいこずえでは、
とりがさえずっています。

さちことおばさんは、

ことりは とつても うたがすき
かあさん よぶのも うたでよぶ
ぴ ぴ ぴ ぴ ぴ
ち ち ち ち ち

と、うたいながら、森のこみちを あ
るいていきました。



きいろや 水^{みず}いろの花^{はな}がさいていま
す。

「おばさん、わたし お花^{はな}をつんでく
るわね。」

「みちくさをしては いけませんよ。」

「みちくさじゃない、ちよつと お花^{はな}
をつむだけ。」

というと、さちこは おばさんの手^てをはなして かけだしました。

「まって。」

おばさんは、いそいでおいかけました。が、さちこは 木^きのかげから、
また べつの木^きのかげへと すばしこくとんでいき、あつというまに
みえなくなりました。

